

「第一歌 苦しみの森」

「おお 矢は金箔の輝きを

陽光の源へと返しつつ進む

山猫が地を這いながら

獲物へと近づき襲いかかるが如く

雌鹿の柔肌へと迫り行く

黄金の時を編み上げる矢尻よ

逃げまどう女どもの髪に掴みかかりねじ伏せた

あの刹那の快楽がお前の先に待っているぞ

鹿皮が波打つ

天空へ向けて泡吹く鼻先を掲げた雌鹿よ！

今度は大地が お前を待ちかねている

暴れる もがけ

空しく手足をばたつかせて

お前の最期の時を この一瞬の内に刻み込め

源大夫のための

この俺様のためだけの世界を

この一刹那の上に刻み止める」

源大夫は栗毛の輝く馬の躰に鞭を入れる

馬は野を流れるように走り抜け

倒れた雌鹿の元へ彼を運んだ

郎等が後に続く

それはまるで決壊した堤防を溢れ出た河水が

泥土や樹木を根こそぎ押し流してゆくに似て

留める者の何一つ無いといった様であった

首を刺し貫かれた美しい雌鹿にはまだ息があった

一刻も早くこの危急の場を駆け去ろうと

起き上がる力は既に失せていることにも気付かずに

四肢は虚しく空を掻きむしる

その死に物狂いの様を睨みつけていた源大夫は

口元に笑みを浮かべて言うのだった

「食うぞ」

郎等の誰かが「いひひひ」と

下卑た笑いを発すると 刀剣を抜き払う

昼日中に月が降り立ったかのごとき冷徹な光が煌めき

鹿の毛皮は腹から切り裂かれてゆく

内臓を取り出せば土と草は朱に染まる

四肢は烈しく痙攣した

雌鹿の目が潤み溢れたことに

気付く者はない

薪が集められ 火は起こされた

雌鹿の頭部が切り離される

源大夫は眼球をしゃぶりながら唇で弄ぶ

洩れ出た蒼い眼差しに

荒くれ者たちが笑い興じる

四肢はそれぞれに関節から外されて

内臓と肉が焙られ

焦げた脂の香りが一帯を充たす

若者たちはたちどころに一頭の雌鹿を腹に収めたのだった

源大夫の時は急いている

彼のための時は

一時も脚を止めることがない

彼はその言葉に反して瞬時を抱くことがない

彼の一時は止めどなく痩せ細りつづけ

その時の急斜面で

源大夫はどこまでも加速する

なぜこれほど烈しく執拗に

破戒が繰り返されるのかと言えば

それは突き破るべき何ものかを捜すようにと

壁を突き破り無限を跳躍せよと

彼の時が命ずるからだ

一瞬の感覚を

自らの手足の刺激の内に

感じ取ることでの時の歩みの一切をこの手にしたいのだ

時の歩みの一步を己の一步としたいのだ
しかしそれは所詮無駄なことだ
腹は充たされ胃袋の空腹が追い払われたにしても
源大夫ばかりは虚しく寂しく
充たされぬ時に絡め取られたままなのである

「緑の炎に包まれて眼球は消える

後には嫌な臭いばかりが立ちこめる

俺の住むこの世は

なんて嫌な臭いばかりが詰まっているだろう

獲物たちの血の臭い

郎等どもの饅すえた臭い

女たちでさえ たきしめた香の奥には

血の臭いを隠し持つではないか

そうだ とりわけ俺は香の匂いが嫌いだ

鼻を突くあの匂いを嗅ぐと

鳥肌が立つ

無性に子どもを身ぐるみはいで

泥田に浸けてやりたくなるわ

俺の住むこの世界は

いやさ この嫌な臭いがすべてであって良い

それは闇の臭いだ

死の臭いだ

墓場から立ち昇る肉の腐る臭いだ

ああ 俺様ほど不幸な人間が居ようか

こうして山を走り抜け 獲物をしとめ

たらふく食って 郎等にかしずかれ

不自由のない やりたい放題

そんな人間で居ながら

俺に幸福はかけらほども残されてはいない

それもこの世の腐臭のせいなのだ

俺様がどれほど己の一瞬を血走った興奮により充たし

実りある一刻を成し遂げようと努力をしても

どれほど手下を増やし 楽しく時を送ろうとも

俺様の時を洗い流し 駄目にするのはいつだって

この世の腐臭ではなかったか
そして まただ

今もまた 俺の快楽はしぼんでゆく

俺の大事な生の一時ひとときがくずおれてゆく

俺の一生はどうなるのだ

俺の時はいつたいいつになったら輝く

俺の時は いつだって空洞だ

いつだって灰色だ

誰もいない時 誰もいない心

何もない人生が 俺の時の素顔なのだ」

炎に見入る源大夫の元に

郎等の一人が駆け寄った

「大夫殿

あの森の向こうに獣道がございます

そこをいま若い夫婦が通ります

夫は荷を背負っておりますゆえ

どこぞの村から追い出されでもした根無し草

格好の獲物かと存じますが

いかが致しましょう？」

「五六人、俺について来い

あとの者は火を決して絶やすなよ」

下卑た笑いが再び樹間を這い回り

新たに薪がくべられて

炎は明るい陽射しをも

燃え上がらせんばかりに立ち上がる

「希望のようなもの

太陽のようなもの

せめては俺の生の終わりを照らし出すという

温もりの約束を与えてくれるもの

そんなものがこの世界のどこかに在るといふなら

俺はいますぐこの不吉な臭いを放つ炎を消し去り

大地にひれ伏してでも請い願おうものを
しかし

そんなものが在るものか

俺の住むこの世界は

刃やいばと棘いばに満ち満ちているばかり

一歩あゆむごとに俺の傷は別の傷に切り裂かれ
血の中から血を溢れ出させる

俺の傷口を舐め取ってくれるのは

この徒党を組むことだけを能とする郎等

蛆虫のようなこいつらだけだ

俺はこいつらがかわいい

そうだ こいつらは俺の腐った身に湧いた蛆だ

白く輝く身が卑しく肥え太った蛆虫だ

こいつらは俺の血を啜って生きる

俺の痛みと哀しみを啜って肥える

そして俺はこいつらの白い肌を撫でては

己の傷をひととき忘れ去ることができなのだ

俺はよく知っているのだ

こいつらが俺の傷口を広げ

俺の身を腐らせ

俺の身の周りに嫌な臭気を振り撒いていることを

それでも俺はこの身がかわいい

この身の傷がいとおいしい

この傷口に口付けるこいつらが愛しいのは

俺がこの身をいとおしむのに似ているのだ」

苦しみの森が風にそよぐ

苦しみの森は悶えつづける

どんな光も葉裏の陰を救い取らず

どんな陰もぎらつく光の傷を癒しはしない

苦しみだけが赤々と萌え出る山を

源大夫等は駆け抜けてゆく

古びた落ち葉を蹴散らし

木の根を踏みしだき

苦しみにより苦しみを侮蔑する脚力が立ち去った後

力強く大地に突き立てられる

それらの若々しく弾むように震える脚が

立ち去った後には 大地に深く

不動の寂寥が注入されてゆくかのようだ

それらの足跡が刻まれた土地には

突如として荒れすさんだ枯れ木が

乱雑に芽生えてゆくかのようだ

樹間の獣道を

その森を苦しみの森とは知らずに

若い夫婦は辿っていた

源大夫を筆頭に六名の薄汚れた荒くれ者は

その獣道に躍り出た

源大夫よ

その時お前は何を見たのか？

お前の知らない光の射し込む見知らぬ森を見なかったのか

お前の陰のような二つの穴

木漏れ日からも見放されて 揺らぐ能もなく

呆然と見開かれるだけの死のような穴には

お前の内側にある暗い眼窩ばかりが

虚しく映し出されていたのではないか

若い夫婦の 妻は幼く可憐であったのに

夫は力に充ちて荷を負い

妻を労りつつ先を行く姿があつたのに

お前の二つの穴には

二匹の名も知らぬ雌雄の動物ばかりが

斜面を転げ落ちる小石のごとくに映し出された

源大夫 お前は何を見たか？

お前の荒れた唇が

こう言ったのを自身の耳でしかと聞いたか？

「鐘突き棒を造るぞ」

お前の命ずるままに三人の郎等が

男を捕らえて仲間の元へ連れて行ったのだ
残りの二人は若妻を

木の葉のように抱え上げると後を追った

光が山を隈なく照らし出した

まるで一瞬を凌駕するには

光速さえあれば充分だ といった風だ

どれほどの光が折り畳まれているか

人に見ることは出来ないのに

人は広大な山の一瞬を

瞬時に誤解して省みることがない

山は襞に覆われている

一瞬は無際限に広がりを見せている

私たちはそのただっ広いだけの世界を前にしては

己を保つことが許されていない

源大夫はしかし

その凶暴な脚を踏み入れた

源大夫の両脚は二本の刃のようにぎらつき

血に飢え

光に追い縋ろうと逸るのだった

彼が一步進むごとに

おのが身の皮膚の厚み

おのが精神の気高い沈黙

おのが身の目眩に似た恐怖が

敵意を腹に秘め その一瞬を遠ざけ

まるで牢獄の壁のように立ちはだかる

彼はいつそう狂おしく踏み出し

辱め 断ち切る

そうだ 自らが断頭台となり

その巨大な刃のぎらつきとなるのだ

大木の幹に張りつけられ 吊された若者は

源大夫の鉈で両腕を断ち切られた

両の肱から血が吹き出る

生が真っ赤に射精する

「止めてやれ」

またしても源大夫

若者の両腕は炎の中で焼かれ

嫌な臭いにまみれ 丸い棍棒のように縮まり

血が止まる

男は二本の鐘突き棒を胴体に付けただけの

得体の知れぬ生き物となった

若妻はと言えば

離れた場所ですら

群がり蠢くのが見られただけだ

「おお 汗が噴き出るわ 噴き出るわ

二本の縮み上がった鐘突き棒の

奴の肩に 額に 背に胸に

雨後の野一面を覆う玉かとも見紛う

体液が狂乱するのが見えるぞ

してみれば奴はまだ生きてはいるのだ

ならばもう少しは弄びものにもなるうというもの

鬪るには鬪らせるのが一番うまいやり方だ

お前ら その段取りを早く付けろ

それがお前らの仕事だからな

行け そして捜せ」

男たちが散って行き 程なく一人が嬉々として戻った

「街道を編み笠の女が一人行きます

相当の上物かと思いましたが」

「にやつくな にやつくな

上物か それならば少しばかり脅かしてやろうぞ

美しい額が歪めば俺の心臓も輝くというもの

その上で賞味させていただくとするか」

源大夫は若者の髻を掴み上げた

「おい お前 助かりたいか

まだ陽は高いがお前に女を抱かせてやる

思う存分その身をこすりつけてこい

使い物になるなら下の鐘突き棒で突いてきても良い

またとない機会 不幸中の幸いぞ

おい お前 立派に勤めてこい

俺様に お前の良い働きを見せるのだ

陽はまだ高いのだからな

まだまだ光を 見足りないだろうが？」

源大夫は若者の乱れた髪を鷲掴み

激しく揺すればそのままに

若者の頸は嵐に遭った細枝のようにしなうのだった

郎等が若者を身ぐるみ剥いで引き立てて行く

源大夫もその後を追った

街道を行く少女は

昼の陽光を一身に浴びた桜色の着物

つましく纏い 編み笠を目深に

お使いものを胸に抱く

急ぎ足だ

そこへ素っ裸の鐘突き棒が躍り出て

飛びかかる

あ という声も虚しく

少女は道端に押し倒された

若者も必死の悲鳴を上げている

その苦しみの森のそここの暗がりからは

押さえ切れぬ笑い声が洩れ始めた

その笑いは己の木陰に向けられて

高く 低く 卑しく また高らかに

陰を成し 陰を笑う

鐘突き棒は少女にまとわりつく

暗がりから か弱いばかりの音が漏れる

若者はまだ悲鳴を上げている

侮蔑の笑いはその上から降り注いだ

若者の背の筋肉の蠢き

それは輝き

奇妙な鐘突き棒の 対称をなす奇妙な動き

若者の腰つき

また蠢き

裸の若者は郎等に引き剥がされ

屹立した一物がまたしても悲鳴を上げた

桜色をした召し物の柔らかい肉体が

彼を死から一重

これまでは遠ざけていたといったような

少女がよろよろと起きあがり

二歩三歩と歩きかけたところへ

暗がりを背にして源大夫が遮った

苦しみの森の暗がりが

そこに立つ

「そなたの名は何という？」

名前を言え

お前の魂の証し

それを剥いでもつとお前を裸にしたい

お前の魂の秘めどころを覆う可憐な花飾り

お前の名を言え

名はお前の肉を貫き

お前の持つ時間の全てを貫く

お前の全てを露わにする真の鏡だ

その名をお前の顔に塗ってやる

その名をお前の乳房に練り込んでやるぞ

その名をお前の股の間で破るのだ

お前の名前がそうして生肉のかげらのように

皸だらけのままに破り捨てられた時

昼の光の輝きを放つさしものお前の名が

暗闇の中 散り散りに裂け散った時

初めてお前の肉は犯され滅び去るだろう
その時こそ

俺の一瞬は陵辱のための飛翔によって
ほんのわずかに撓み

ほんのわずかに乗り越えられる

その微かな歓びのための資として

お前が役に立つのだから

名を言え

お前の隠し持つ

最良の宝を俺の手に渡せ

拾い上げたお使いものを胸に握りしめ

少女は着物の裾を素早く整える

その睨みつける眼には何も映らなかった

上空には昼の月 檸檬の香を漂わせる

「言わないか

お前の身のためにも 俺は言うのだぞ

あるいはお前は

温い血のつながる血縁の者かも知れぬのだ

名を言えば 家を教えるならば

それも分かるうというもの

世間は思いのほか狭いものだからな

都の人間の大半は

古からの熱い坩堝の歴史の編み目に掬いとられ

どこかしらで絡まり合い

どこかしらでつながっている

と言っても良いほどのだ

誰が好きこのんで己に縁のある女子を傷つけたりするものか

さあ 名を言ってみろ

俺にあつてはならぬ間違いを犯させるなよ」

少女の顔は透き通ったまま

美しく動かない

その小さなつま先は

じりじりと陰から退いていこうとする
それに応じて源大夫も

行かせまいと行く手を阻もうとする

「どうでも言わないか

まあ いい

して その腰に帯びているのは横笛か

お前は笛を吹くのか」

その刹那 森が息を呑んだ

何かが木々の奥に響いたようだ

「ならばたった今吹いてもらおうとしよう

ただし その細枝ではない

この俺様の太い方を」

源大夫の悪相が悪臭を放ち

怖ろしい笑みが極まったとき

街道に馬の蹄の音が響きわたった

「畜生め 邪魔が入ったか

青天の霹靂も台無しか

奇蹟は起きぬのか」

源大夫は馬上にある若い武士を睨み上げた

街道に張り番していた郎等二人を

枯れ葉色の着衣もろとも蹴散らしてくる

男たちの銀色に輝く刀剣も

割れた鏡 氷の破片と見えた

馬から飛び降りるや襲いかかる新手の郎等

次々と切り捨てて 見る間に四人の若者が

街道脇の暗がりへと転がり落ちる

「何をす

俺らは少々戯れていたばかり

飛んだ言い掛かりだわ」
「問答無用」

武士は血塗れの剣を引き下げたままに
大腿で近づいてくる

源大夫は恐怖に駆られた
まるで死が歩いてくるようだ

思わず後ずさりして

ついにはその場を走り去った

郎等共も通り雨が行き去るが如くに引いてゆく

気丈の少女と仁王立ちの武者とが見合うところへ
街道から武士の従者が泥だらけのまま走り寄る

「時頼様 あ ご無事かあ

あいすいません 三郎め 後れをとりましたあ

あいすいません しかし急に走り出すから

疾風にわたくし蹴り飛ばされるかとお

行くなら行くと行ってくれなくてはあ ハア

あいすいません 全く 気の利かないことでした フウ」

「いや 済まなかった

私も慌てていたからな

見ろ こんなに胸が高鳴るぞ」

「いけない こんなに土が」

頬染めた少女が三郎の泥を拭い取ってやる
昼の光が従者三郎を洗うようだ

「いや お嬢様

あいすいません この三郎めは

泥だらけのままにほったらかしにしておいても

死にはしませぬゆえ

あ いけません 手拭いが汚れて

お召し物の袖まで土が

いやもう ホントに

あいすいません ああ もう 嬉しい」

「そなた 怪我はなかったか」

「あい」

「そうか 間に合って良かった」

「あの お札が 遅れて

ありがとうございました

恐い目に遭いました」

「うむ この森は良からぬことがあると聞く

街道とは言え 女子の一人歩きはせぬ方がよい」

「あい」

「そなた 名は何と言う」

少女はこの度は嬉しく聞いた

「皆は 私を横笛と呼びます」

「そうか その腰にあるのは横笛か

いつか聞かせてくれよ」

「あい」

「私は 齋藤時頼

この度瀧口の警護を仰せつかった

叔父君の所へご挨拶に行った帰りだ

そなたも宮へ参るのか」

「あい 下仕え致しております

今日はそのお使いものを申し受けまして」

「ならば宮までお送り致そう」

時頼は横笛を抱え上げ

疾風の背に乗せてやった

横笛に照らされて

土までが空を映すかのようだ

「横笛殿 少々気になることがありますゆえ

しばらくこちらで お待ち願いたい」

「分かりました」

「三郎　ここで横笛殿を頼む」
「かしこまりました」

森は太陽の痛みに身悶えして
その暗がりを一層闇深くしながら
一帯の風に呻くように答えていた
風は伸び縮みを繰り返しながら
森を抜ける道を尋ねるのだが
遂に森を逃れることはなかった
時頼は

藪の奥に潜み　震えと目眩に襲われながら
微かに命を保っていた素っ裸の若者の下へ歩み寄る

「へえ　お許しを　お許しを　お許しを……」
「そなた　その血だらけの肘は焼かれた痕だな」

苦しみの森はわなないた
風も口を閉ざすほどに

「そなたは一人旅か」
「い　いえ　妻があちらに」

言うや否や若者は藪を掻き分け
名を呼び　妻の姿を求めた

雲が陽を遮った
土手下の暗がり　若妻は倒れ臥してあった

乱れた裾を整える手はなく
はだけた胸元を覆うものなく

喉元には鮮血が　まだ湧きつづけている
悲鳴が森を塗りかえた

声は樹木の葉を覆い　風を押し戻し
洩れた陽光の棘をぎらつかせる

若者の肩に一粒の雨が落ちた
玉を成す汗を　跳ね飛ばす

雨はためらい　森に触れる

血に混ざり　冷えてゆく肌を洗う
若者の裸の背は　雨に向かって請うように見えた
美しい屍の傍らに若者は跪く
涙が土に染みだした
時頼は
しばらくその背を見つめていたが
刀を抜くと　その首をはねた

2003.8.30
2004.2.8